

パッド
ク
残影



海 渡 英 祐

昭和9年生れ

東京大学法学部卒

昭和42年「林伯——八八八年」

で、江戸川乱歩賞受賞

日本推理作家協会会員

主な作品

「極東特派員」(東都書房)

「影の座標」(講談社)

「無印の本命」(立風書房)等

パドックの残影

著 者——海渡英祐 ©

発行者——下野 博

発行所——株式会社立風書房 東京都品川区東五反田三—六—一八

電話・〇三—四四七—一一九一 (代)

振替・東京七四四九三 一四

印刷所 壮光舎印刷株式会社 株式会社美術版画社

落丁・乱丁本はお取替えいたします。

0093-1224-8909

★目次



1月 金杯
京成杯
AJC杯

2月 東京新聞杯
東京四歳ステークス
目黒記念 クイーンカップ

3月 弥生賞
中山記念
スプリングステークス

4月 ダイアモンドステークス
桜花賞 京王杯S・H
天皇賞 皐月賞

第一話 気まぐれな馬———5

5月 NHK杯
アルゼンチン杯 ダービー
オークス

第二話 極秘情報———43

6月 読売カップ
安田記念
日本短波賞

7月 日本経済賞 ローカル競馬

第三話 出馬表は語る———88

8月

9月 クイーンステークス
京王杯A・H
セントライト記念

10月 京成杯三オスステークス
オールカマー
牝馬東タイ杯

11月 ダービー卿 菊花賞 天皇賞
目黒記念

第四話 大穴の秋———181

12月 クモハダ記念
朝日杯三歳ステークス 有馬記念
中山大障害

第五話 灰色の賭け———235

パ
ド
ッ
ク
の
残
影

第一話

気まぐれな馬

1

5 気まぐれな馬

日刊紙『東洋スポーツ』の競馬記者、栗本^{くりもと}章治^{しょうじ}は、中山競馬場の本部の建物を出ると、観客席の方へちらりと視線を走らせた。土曜日曜には、おびただしいファンでふくれ上り、興奮と熱気に包まれるスタンドも、いまは人っ子一人いない。

一般のファンと違って、平日の競馬場の雰囲気をよく知っている彼の眼にも、それは奇妙にわびしい眺めだった。昨夜来の雨は上ったが、空は厚い灰色の雲におおわれていて、よけい寒々とした印象を受ける。ただ、ようやく緑に色づき始めた芝生が、春のクラシック戦線の到来を告げている。

十年あまり前、栗本は初めて競馬の担当を命じられたとき、つまらぬ仕事にまわされたものと、正直なところ、がっくり来たものであった。実際、その当時は、土曜日の朝などはスタンドの人影もまばらで、大レースのある日でも、五万も入れれば大変なことだった。スポーツ紙でも、競馬の記事が派手に扱われるのは、せいぜいダービーのときぐらいのものであったのである。

今日、その頃のことを思い返すと、栗本はある種の感慨をおぼえずにはいられない。最近、観客数十万というのは、ごくふつうのことになってしまったし、一般紙や週刊誌までがさかんに競馬関係の記事をのせ、情報過多の弊害ということさえ言われているくらいである。この道一本で通して来たおかげもあるが、いまでは、彼を書く署名入りの予想記事が、かなりのスペースを占めて掲載されている。春のクラシック戦線の頃ともなると、ときどき、自分の仕事の重さといったものを、いやでも意識してしまふことがあるくらいだ。

地下道を通って、厩舎きうしやの方へ向いながら、栗本は先々週に行われた『弥生賞』やよいレースのことを思い出していた。このレースは、四歳クラシックの最初の前哨戦として重視され、関西からも何頭かの有力馬が乗りこんで来るのが、毎年の例である。

今年は関西ナンバー・ワンの呼声が高いコトブキオーが回避してしまい、ほかにチムールなど東上がおくれた有力どころも何頭かいて、東西勢力の比較は、次の『スプリング・ステークス』まで待たなければならなかった。しかし、関東の有力馬はほとんど顔をそろえ、ファンの胸をおどらせたものだった。

とはいえ、下馬評はヒガシハヤテとアサアケの二頭に集中し、穴党ファンにとっては、どう考え

ても妙味のあるレースとは思われなかった。新聞予想の本命対抗の印も、二頭のどちらに二重丸をつけるかの違いだけで、両雄の対決がこのレースの見どころということになっていた。

ヒガシハヤテは、府中の大倉厩舎の所属馬で、三歳時から評判が高く、新馬戦、特別レースを連勝してエリート・コースにのり、朝日盃三歳ステークスを制して、関東のダービー最有力候補の座を占めた。いわゆる良血馬であるし、大倉はもともと勢力のある調教師の一人だし、五百キロ近い堂々たる馬体からくり出すスピードは圧巻で、見るからに名門出の美丈夫といった感じの馬である。

一方のアサアケは、何から何までヒガシハヤテとは対照的だった。第一に、この馬は父親が内国産馬で、母系も活躍馬がほとんど出ていないファミリーである。どういうものか、日本では外国生まれの種馬がもてはやされ、内国産の種馬はなかなか優秀な牝馬をつけてもらえないのだが、アサアケの場合も、その例外ではなかったのである。四百五十キロぐらいの鹿毛かげの馬体は、決して貧弱ではないが、何となくずんぐりした感じで、さっぱり見栄えがしない。

そして、アサアケはいわゆる気のわるい馬で、おかげで、新馬戦にはとうとう勝てなかった。初戦は大きく出おくれ、最後にものすごい追込みを見せたが、わずかに及ばず三着——二戦目も出おくれ、今度は直線であわやというところまで来ながら、大きく外へよれて、結局ハナの差とどかなかったのである。

しかし、その実力は誰もが認めるところで、果して三戦目の未勝利戦では、まともに出たと思つたら、そのまま二着に大差をつけて勝ち、暮れの中山の特別レースを二つつづけて勝って、有力馬の仲間入りをした。明け四歳になってからは、ヒガシハヤテに次ぐ実力馬と見なされていたファイ

アボールにオープン戦で五馬身の差をつけ、これで四連勝、その強さをまざまざと見せつけたのだった。

新馬戦のころに見せた出おくれ癖も、その後は影をひそめ、いつも好位につけて、直線で一気に伸びてくる安定したレース運びで、『弥生賞』でヒガシハヤテと人気を二分するようになったのも、当然のことだった。単勝売上げはヒガシがわずかに多かったが、三番人気以下はぐっと落ち、連勝複式の予想配当は、ヒガシ——アサアケの組合せは三百円を切っていた。

ところが……レースの結果は、まことに意外だった。アサアケはまた悪い癖が再発したのか、スタートであおってしまった。だが、それほど大きな出おくれではなく、一コーナーをすぎたところで四番手につけ、これなら好勝負と思われたのだが、どうしたことが、向正面からはずるずると後退する一方で、まったくの完敗だったのである。勝ったのはヒガシハヤテ、二着が四番人気のベンケイ、三着が三番人気のファイアボールで、アサアケの惨敗を除けば、だいたい順当な結果だったが、人気が二頭に集中していたために、連勝式は千円以上の配当になった。

人気馬が負けるのは、べつにめずらしいことではないが、それにしても、アサアケの負け方は、あまりにもだらしがなかった。この馬の勝負強さを買って、本命におした栗本は、レースを見ていて、どこか故障でも起したのではないか、と思っただくらいである。

アサアケの敗因については、いろいろなことが言われた。やはり出おくれがたたったのだとか、騎手の中原利也が若さを暴露して、すっかりあわててしまったせいだとか、当日の重馬場が原因だとか、いろいろな意見が出た。もちろん、この馬の実力を買いかぶりすぎていたのだ——という説

もあり、血統的にもこの辺が限界だろうという評論家もいた。

外国には「馬の負ける理由は百一つある」という名文句があるそうで、たしかに競馬の敗因などというものは、後からこじつけようと思えば、いくらでもこじつけられる。本当の理由は、当の馬と神様にしかわからないのかもしれないが、それにしても、アサアケのあまりの惨敗ぶりに、栗本はいまだに釈然としないものを感じている……。

彼は足もとを気にしながら、厩舎の立ち並ぶ一画へ入っていった。ここでは、馬が第一に考えられているから、道はやわらかな砂地で、ぜんぜん舗装されていない。雨が降ると、すごいぬかるみになってしまうのである。お昼をすぎたばかりで、午後の乗り運動はまだ始まっておらず、あたりはスタンドと同じようにひっそりしている。

栗本は、島内厩舎の前で足をとめた。アサアケの馬房の前に、担当馬丁の松浦実^{まつらみ}が立っていて、何故かぎくりとしたような表情を浮べ、こちらをふりかえった。

「やあ、どんな具合だい？」

「調子はいいいはずなんだけどね……どうして負けたのかさっぱりわからないよ」

松浦は浮かぬ顔で言った。

馬丁は、二頭の馬を担当するのがきまりで、その一切の面倒を見る。自分が担当している馬が入賞すると、進上金といって、その賞金の五パーセントが貰える仕組みになっているから、強い馬を持つのは大変な好運だが、それだけに神経も使う。松浦はまだそれほど経験のある方ではなく、アサアケのような馬を持つのはこれが初めてのはずである。彼がいらいらした表情を浮べているの

も、無理はなかった。

「やっぱり、この馬、気がわるいのかなあ」

松浦はつぶやくように言った。

「まあ、今度はあんなことはないだろう……大將はいるかい？」

松浦は小さくうなずくと、またアサアケの方に視線をもどして、ぼんやりとその場に立ちつくしていた。

栗本は馬房に接続した住居の方へ足をむけた。調教師の中には、ほかに自宅を持っているものもいるが、こうして馬といっしょに住んでいるものが多い。

「ごめん下さい……」

玄関から声をかけると、島内久しまうちひさしが顔を出した。現役時代には、玄人好みくろんどのする渋い名人芸を見せた男だが、地味でくそまじめな性格は今も変わっていない。無口で不愛想で、記者泣かせという定評があったが、どういうものか栗本とはうまが合い、以前から親しくしている仲だった。深くつきあってみると、スルメを噛みしめるように、しだいに味が出てくるといったタイプの男なのである。

入ってすぐのところだが、事務室兼応接室といったしつらえになっていて、壁には、管理馬の優勝記念写真がかざられている。どこかの厩舎へ行っても、その点はそっくり同じで、部屋を立派に見せるのは、大レースの記念写真だけだといってもいいぐらいだ。

しかし、島内は調教師として、まだ大きなレースの勝馬は出していない。わずか十頭あまりの管理馬では、重賞を取るような馬にはなかなか恵まれず、これまでにローカルの重賞を一つ取っただ

けである。

それだけに、島内がアサアケに、どんなに大きな期待をかけているかは、想像にあまりある。大厩舎ならともかく、彼ぐらいの調教師としては、クラシックを争うような馬を出すことは、一生のうちには何度もないだろう。弥生賞の惨敗の直後に会ったときには、島内はまるで放心状態で、受け答えも満足にできないくらいだった……。

ソファに腰をおろすと、島内の長女の朝子^{あさこ}が、お茶を運んで来た。父親に似て小柄だが、均整のとれた体で、なかなかの美人である。くりくりした大きな眼、小麦色の肌、人なつっこい笑い——そこには、新鮮な果実のような魅力がある。なかなか頭もよく、二年ほど前に短大を卒業しているが、変に取り澄ましたところもなく、気持のやさしい子だった。

「栗本さん、お仕事は長くかかるんですの？」

朝子はいつもと同じように、気がねのない口調で声をかけて来た。

「いや……今日は本部の方の取材が主なので、厩舎まわりはそついでなんだ。あと三つ四つ寄ったら、帰るつもりだよ。一時間ちょっともあれば、片づくと思う」

「それじゃ、車でお送りしましょうか。わたしも、東京へ行く用があるから」

「そいつはありがたい。ぜひ頼むよ」

につこり笑って、奥へ引っこんで行った朝子を見送って、栗本はいまさらのように、彼女の成長ぶりに驚いた。

考えてみれば、十年ほど前に、彼が新米記者として島内の家を訪ねたときには、朝子はまだ小学

生だったのだ。おれはもう若くないんだな——と思って、栗本はひそかに苦笑した。

2

「どう、その後、何か思い当たるふしはあった？」

栗本は、島内に向って言った。もちろん、アサアケの敗因のことである。

「ない……検査にまわされたけれど、何も出て来なかったし、獣医に診てもらったが、どこにも異常はないというし……」

検査というのは、薬物検査のことである。レースの終了後、三着までに入った馬は尿や唾液を採取され、それが競走馬理化学研究所へ送られて、興奮剤などが使用されなかったかどうか調べられるのだが、そのほか、不審な負け方をした馬も、裁決委員の指定で、検査にまわされることがある。一時的に馬の競走能力を下げる薬品もあるからだが、弥生賞のアサアケにも、このケースが適用されたのである。

「中原の話じゃ、レースのあとで、いつになく荒い息をしていたということだが……」
島内はうなずいて、

「そのところだが、どうもわからんのだ。おれが今まで扱って来た馬の中で、アサアケは並みはずれて心臓の丈夫なやつだよ。その点が、この馬のいちばんの長所だと思っているくらいだ……ほかの馬が汗を流して、息をはずませているのに、アサアケだけは涼しい顔をしている……」

「そうだね。最初のレースのときから、僕もそれには気づいていた。だから、弥生賞の負けっぷりが、どうしても納得できないんだが……獣医が何ともないと言うのなら、その方の故障じゃないわけだね」

「といつて、前のレースから十分に間を置いて使っているんだから、疲れが残っていたはずもないし……」

「やはり重馬場かな？」

「道悪は決して下手じゃないよ。相手は弱かったが、未勝利を勝ったときも重馬場だったんだから」

「中原の騎乗ミスという見方もあるけど、その点はどうなの？」

親しい仲なので、栗本は遠慮なくたずねた。

「そうは思えない。あの程度の出おくれなら大したことじゃないし、そんなに無理もしていない。中原は、何故かまるっきり馬が動かなかった——と言っているが、おれも見えていて、その通りだったと思う」

「それじゃ、この後もずっと中原を乗せるつもり……？」

クラシック候補などと言われるようになると、それまで乗っていた騎手をおろして、定評のある騎手に変えることがよくある。大きな騎乗ミスを犯したりすれば、なおさらのことで、すでに一部では、中原はおろされるのではないか——という噂が出ていたのだった。

「ああ、今のところ変える気はない」

島内は強い語調で言った。

この厩舎の専属騎手第一号の中原は、師匠によく似た、地味な努力家タイプだ。最近、ようやく頭角をあらわしてきて、びっくりするような巧みなレース運びを見せ、一部で注目されているが、いわゆる花形ジョッキーの中には入らない。しかし、島内は中原を可愛がり、十分に信頼もしているようだ。

栗本は、弥生賞の日の最終レースのバドックの光景を思い出していた。人気馬に乗って惨敗すると、心ないファンから「バカヤロー」を浴せかけられるのは、べつにめずらしいことではないが、あのとときの中原への罵声はすさまじいものだった。「下手くそ」、「死んじまえ」などはまだよいとして、「八百長野郎」という文句を、しつこく連呼しているやつがいたのである。顔面蒼白の中原に同情しながらも、そのとき実をいうと、栗本もちょっとぎくりとしたのだった。あのレースでアサケを初めから除外できれば、ヒガシハヤテを軸にして、馬券は二、三点でまず固く取れ、しかもけっこういい配当がつく——そんな考えが、ちらりと浮んできたからである。もちろん、中原のようなまじめな騎手が、八百長に手を出すとは、常識では考えられなかったが……。

いまの島内の強い語調には、そうした疑惑への反撥もこめられているように思われて、栗本はひそかに自分を恥じた。

「結局、何故か知らないが、馬が走る気を起さなかった、ということなのかなあ……その後の状態はどうなの？」

「上々だ……まあ、今度のスプリング・ステークスを見ていてくれ。かならず巻き返してみせる。敵は西のコトブキオー一頭、ヒガシハヤテなんて大したことはない」